

《ゼミ活動報告》

【2024年度 元治ゼミ（3年生）活動報告】

元治恵子

2024年度元治ゼミの3年生は、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから、各自の興味あるテーマと関連する個票データの提供を受け、データを分析しレポートにまとめました。2年生の後期にデータ分析について学んだものの、実際に研究テーマ（仮説）を明らかにするために、大規模データを分析し、結論を導くという過程は、初めての経験であり、途中でくじけそうになったこともあったかと思いますが、ここに成果を報告することが出来ました。

1. 子どものICT利用による学力に関する研究

市川 拓実

2. 学生時代に行われるいじめの特徴と影響

北島 広大

3. 放課後の時間の使い方に関する研究

都築 勇仁

4. 幸せを感じるのに必要なこと

—配偶者がいて子どもがいる女性が幸せを感じるのに必要なことは何なのか—

照井 彪吾

5. 改革開放前後の労働者の待遇水準の変化

彭 震宇

〈謝辞〉

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから個票データの提供を受けました。心から感謝申し上げます。

子どものICT利用による学力に関する研究

市川拓実

はじめに

今回、このテーマにした理由は近年、日本では子どもがスマートフォンなどを持つのが当たり前の時代になり、高校時代ICT推進校に通っており、ICTが身近な存在だったので、ICTがどのように学力に影響を及ぼすのか気になったのがこのテーマにしたきっかけである。ICTとは情報や通信に関する技術の総称のことである。

テーマは、ICT（情報通信技術）の利用が子どもの学力や成長に与える影響についてである。特に焦点を当てる問いは、「ICTの利用は子どもの学力を低下させるのか」だ。この問いに対する仮説として、高校生がICTを最も積極的に利用していることと、その学業成績が低い傾向にあること

が考えられる。

分析のアプローチは以下の項目を考慮する。学校段階（小学校、中学校、高等学校）、携帯電話の保有状況、平日の勉強時間、家庭での学習でICTをどの程度利用しているか、そして現在の学業成績である。

学校段階（小・中・高）によってICT利用によって子どもの学力がどのように変わってくるか、データをもとにして分析を行った。勉強時間や家庭学習でのICT利用状況などに視点を置き、それぞれの学校段階でどのような違いや特徴があるのかを分析する。

第1章 携帯電話の有無について

表1は、小、中、高校生別で携帯電話を持っているのか分析した結果を示したものである。分析の結果からわかることは、学校段階が上がるにつ

表1. 携帯電話の有無について

携帯電話の有無					
	持っている	家族兼用	持っていない	無回答	総数
小学校	773 (25%)	189 (6%)	2052 (65%)	132 (4%)	3146
中学校	1340 (41%)	239 (7%)	1528 (46%)	191 (6%)	3298
高校	3518 (92%)	11 (0%)	93 (2%)	201 (5%)	3823
総数	5631	439	3673	524	10267

表2. 平日の勉強時間について

勉強時間						
	しない	15分から 1時間	2時間から 3時間	4時間以上	無回答	総数
小学校	118 (4%)	1915 (61%)	758 (24%)	289 (9%)	66 (2%)	3146
中学校	214 (6%)	1334 (40%)	1412 (43%)	278 (8%)	60 (2%)	3298
高校	677 (18%)	1454 (38%)	1547 (40%)	99 (3%)	46 (1%)	3823
総数	1009	4703	3717	666	172	10267

れて持っている人の割合は大幅に増えているという
ことである。その中でも、中学生と高校生を比較
すると41%から92%と伸び具合はとても大きく
なっている。ICTは中学生辺りから身近なものに
なっているのではないかと考えられる。

第2章 平日の勉強時間について

表2は、小、中、高校生別で平日にどのくらいの
時間勉強しているのかを分析した結果を示した
ものである。結果からは、勉強をしないと1番多
く答えたのは高校生で18%になっている。逆に4
時間以上と多く勉強しているのは小学生で9%と
なっている。小学生はしないと答えた割合が一番
低く4%となっている。高校生は携帯電話を持っ
ている人の割合がとても多く、小学生が一番少な
い。携帯電話の有無と勉強時間には関連性が少し
はあると考えられる。

第3章 家での勉強にICTを使うかについて

表3は、小、中、高校生別で家での勉強でICT
を利用するか分析した結果を示したものである。
よくある、時々あるは高校生が一番多い結果に
なった。携帯電話を持っている人が多いというこ
所で納得の結果である。だが、小学生も中学生
も高校生と同じくらいICTを利用しておりICTが
世の中の学習に普及していることが分かる。まっ
たくないと答えたのは小学生が一番多く50%とい
う結果になった。全体的に見て、学校段階による
差はなかったと言える。

第4章 現在の成績について

表4は、小、中、高校生別での現在の成績デー
タである。小学生は真ん中39%で一番多く、中学
生は真ん中より下、真ん中より上、上の方で一番

表3. 家での勉強でICT利用を使うか

ICT 利用						
	よくある	時々ある	あまり ない	まったく ない	無回答	総計
小学校	136 (4%)	679 (22%)	598 (19%)	1577 (50%)	156 (5%)	3146
中学校	181 (5%)	766 (23%)	787 (24%)	1378 (42%)	186 (6%)	3298
高校	219 (6%)	904 (24%)	1036 (27%)	1449 (38%)	211 (6%)	3819
総計	536	2349	2421	4404	553	10263

表4. 現在の成績

現在の 成績							
	下の方	真ん中 より下	真ん中	真ん中 より上	上の方	無回答	総計
小学校	352 (11%)	575 (18%)	1233 (39%)	530 (17%)	332 (11%)	124 (4%)	3146
中学校	535 (16%)	668 (20%)	889 (27%)	706 (21%)	421 (13%)	79 (2%)	3298
高校	751 (20%)	777 (20%)	1095 (29%)	785 (21%)	347 (9%)	64 (2%)	3819
総計	1638	2020	3217	2021	1100	267	10263

多い結果になった。高校生は下の方、真ん中より下、真ん中より上で一番多い結果となった。成績に関しても学校段階による大幅な差は見当たらず、強いて言うのであれば、高校生の学力成績が少し悪いという点が分かった。それから、小学生が下の方が少ないというところである。どの学校段階も真ん中が一番多いという結果になった。家での勉強時間が少ない結果であった高校生はそれに伴った成績になっていると考えられる。

第5章 結論

ICT利用による子どもの学力や子どもの成長度合いに関してデータを用いて考えていったのだが、まず、携帯電話は多くの子どもが持ち、利用しているが、その中でも高校生の大半が持っているという結果が出た。現在はスマートフォンを持つのが当たり前の時代になり、持っていないと不自由などの点から親の意識なども変化し、多くの子どもが持っていると考えられた。そして、高校生が一番ICTを利用しているという仮説は支持されたと言える。あまり大差はなかったが高校生が一番利用していた。これは勉強のレベルが上がる高校生は最新のテクノロジーを駆使しながら工夫して勉強に取り組んでいる証拠だと考えられた。最後に、成績を見てみた結果、そんなに大差はなく、ICTを利用するから成績が良くなる、悪くなるといった結果はなく、個人の勉強の意識次第ということが分かった。だが、成長という観点においては、小さいうちからICTに触れていくことでこれから更にICTが推進される世の中に対応し成長できる人材になれるか、なれないかが変わってくると考えた。

【参考文献】

高橋純、2023、『教育方法とICT』学文社。

デジタルナレッジ、2023、「ICT教育とは？学校教育での導入事例などを解説」、

(<https://www.digital-knowledge.co.jp/about/esi/ict/>)
文部科学省、2014、「ICTを活用した教育の効果」、
(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/04/11/1346505_07.pdf)

【謝辞】

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「子どものICT利用実態調査」（ベネッセ教育総合研究所）の個票データの提供を受けました。心から感謝申し上げます。

学生時代に行われるいじめの特徴と影響

北島 広大

1. はじめに

この研究ではなぜいじめはなくなる事なく増加傾向をたどっているのか？また、今日における教育問題の1つであるいじめはなくなることはなくその事例は多岐にわたる中で、学校でのいじめにはどのような特徴があるのかについて検討する。

2. 研究の問い

今回研究をしようとして選んだテーマは「いじめ」についてである。さらにその中でも学生時代の小中高生を観点として、研究を進めた。

このテーマを基に研究したいと考えたきっかけや理由としては、まず教育に関わる問題の中で問題視されている問題は何かを考えた時に自身の経験も踏まえ学生時代に起こる学校でのいじめが問題視されていると考え今回のテーマ選定に至った。

3. 選考研究の知見

いじめが増加傾向をたどっている今日にどのよ

うな形でいじめが行われ特徴があるのかという事について著者の神村は次のように述べている。

「ほとんどのいじめは無差別行為ではなく被害者の特性をつかみきっかけとなっていじめへと発展する」(神谷1996. 505)

先行研究についていじめには環境といじめは無差別に行われるのではなくきっかけがあると述べている事からも、年齢やいじめ内容にも特徴があるのではないかと考えられ、そこからいじめを行うきっかけや理由なども見えてくると考えられる。

4. 仮説

先行研究を踏まえ、仮説として「いじめが発生している年代は中学生で、いじめの多くは暴力である」という一つ目の仮説と「いじめが起きている場面での加害者の抱える最も多くの心情はいじめている感覚を持っていないのではないか」の合計2つの仮説立てる。仮説をたてた理由として、いじめの件数が増加傾向にあるのは先行研究にあったいじめの非無差別性だけではなくいじめ自体にも児童及び学生の年齢やいじめを受けた内容に特徴が見える、あるいはそれが、いじめの非無差別性に関わっているのではないかと考えたためである。

5. 方法

分析に用いるデータは東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターから提供を受けた「モノグラフ小学生ナウ「いじめの残したもの」2002」の調査データを用いる。また、調査データにおける対象の総数1326人(男性358人・女性968人)のデータを基に、度数分布表をデータとしていじめを受けたあるいはいじめた人を独立変数、いじめの内容及び時期(小学生・中学生・高校生)を従属変数として用いて考える

ものとする。

6. 分析結果

この表1から小学校時代でのいじめ単体で考えるといじめがあったと答える人が1096人で約8割の人がいじめはあったと答える割合が多いという事が分かると共にいじめが全くなかったと答える割合が2割を下回ると考えると大多数の人が小学校時代でのいじめがあったという事が分かる。一方で2割近くの方は小学校時代ではいじめの件数と比べてもなかったと答えている。

一方で中学と高校のいじめがあったかの度数分布表では大きな差で中学では8割に対して高校では6割と減少がみられた。

小学校時代で見る度数分布表の分布ではいじめがあったことに対するいじめた事に絞るといじめた人は少しあったと答えた人を含めて6割近くになる事から半数はいじめた経験があると考えられる。

小学校時代でのいじめた人と比べるといじめられた人の度数分布ではいじめられた経験の方が小学生時代は何度もあったという点が見て取れる。一方でいじめという定義の少しという表現が曖昧な点も関係しているだろうが、少しいじめた事があったという点は見えてくる事ができた。いじめられた人で見るといじめられた事が何度もあったという人は100人を超え加害者よりも被害を受けた側が多いと分かる。

傍観者の人数はやはりいじめた人、そしていじめられた人、傍観者含め経験した事のある人の中で何度もあったと答える人の割合が約25パーセントで最も多くなった。この結果からわかる事としていじめを注意や対処のしにくい環境が存在するという証明になりえる数値が見て取れた。

上記は中学時代におけるいじめられた人、いじめた人、傍観した人を示す度数分布表であるが、いじめた人、いじめられた人については小学校時

表1. 小学校時代のいじめの有無

	度数	パーセント	有効パーセント
まったく なかった	193	14.6	14.6
あった	1096	82.7	82.7
無回答	37	2.8	2.8
合計	1326	100.0	100.0

表2. 中学時代のいじめの有無

	度数	パーセント	有効パーセント
まったく なかった	221	16.7	16.7
あった	1070	80.7	80.7
無回答	35	2.6	2.6
合計	1326	100.0	100.0

表3. 小学校時代に人をいじめた経験の有無

小学校時代 人をいじめた事があるか	度数	パーセント
何度もあった	72	6.6
少しあった	532	48.5
まったくなかった	395	36.0
無回答	97	8.9
合計	1096	100.0

表4. 小学校時代に人にいじめられた経験の有無

小学校時代 人にいじめられた事	度数	パーセント
何度もあった	124	11.3
少しあった	473	43.2
まったくなかった	419	38.2
無回答	80	7.3
合計	1096	100.0

表5. 小学校時代にいじめを傍観した経験の有無

小学校時代 いじめを傍観したこと	度数	パーセント
何度もあった	277	25.3
少しあった	677	61.8
まったくなかった	101	9.2
無回答	41	3.7
合計	1096	100.0

表6. 中学校時代に人にいじめられた経験の有無

中学校時代 いじめられた事	度数	パーセント
何度もあった	68	6.4
少しあった	359	33.6
まったくなかった	547	51.0
無回答	96	9.0
合計	1070	100.0

表7. 中学校時代にいじめを傍観した経験の有無

中学校時代 いじめを傍観したこと	度数	パーセント
何度もあった	206	19.3
少しあった	693	64.8
まったくなかった	129	12.1
無回答	42	3.8
合計	1070	100.0

表8. 高校時代に人にいじめられた経験の有無

高校時代 いじめられた事	度数	パーセント
何度もあった	20	4.9
少しあった	96	23.4
まったくなかった	252	61
無回答	44	10.7
合計	412	100.0

表9. 高校時代に人をいじめた経験の有無

高校時代 いじめた事がある	度数	パーセント
何度もあった	12	2.9
少しあった	77	18.7
まったくない	278	67.5
無回答	45	10.9
合計	412	100.0

代と比較しても全体が選択した人と割合双方とも減少傾向にある事が小学校時代と中学校時代を比べて考える事ができる。一方で傍観者の割合と傍観したことが何度もあると答えた人は小学校と中学校と比べると減少してはいるものの、傍観したことが何度もあると少しあると回答した二つを合わせると小中学校共に8割を超えており、依然としていじめを見て見ぬふりをする人が大半である

という事が読み取れる。

高校におけるいじめた人といじめられた人の比較においてはどちらも全くなかったと答える人が412人に対して250人超えて割合としても6割を超えていて半数以上を占めている事からも、分かるように、小学校時代や中学校時代と比べて高校ではいじめ行為自体が減少しているという事が考えられる。また度数分布表を見てもいじめた事があ

表 10. いじめの内容（暴力）についての度数分布表

いじめ暴力	度数	パーセント
小学校選択	41	7.6
小学校非選択	500	92.4
合計	541	100.0
中学校選択	27	8.1
中学校非選択	305	91.9
合計	332	100.0
高校選択	4	4.8
非選択	80	95.2
合計	84	100.0

表 11. いじめの内容（無視）についての度数分布表

いじめ無視	度数	パーセント
小学校選択	385	71.2
小学校非選択	156	28.8
合計	541	100.0
中学校選択	243	73.2
中学校非選択	89	26.8
合計	332	100.0
高校選択	25	29.8
非選択	59	70.2
合計	84	100.0

表 12. いじめの内容（嫌がらせ）についての度数分布表

いじめ嫌がらせ	度数	パーセント
小学校選択	289	53.4
小学校非選択	242	44.6
合計	541	100.0
中学校選択	126	38.0
中学校非選択	206	62.0
合計	332	100.0
高校選択	27	32.1
非選択	52	61.9
合計	84	94.0

る人・いじめられた事がある人が全体的に減少して
いて高校では減少しているという事が見て取れ
る。

次にいじめの内容についての度数分布から見る
分析結果である。

全体として高校ではいじめ全体の母数が少ない

表 13. いじめの当時の気持ち（単なる遊び）の度数分布表

いじめ当時の気持ち（単なる遊び）	度数	パーセント
はい	284	42.1
いいえ	340	50.4
無回答	50	7.4

表 14. いじめの当時の気持ち（相手を困らせる）の度数分布表

いじめの当時の気持ち（相手を困らせる）	度数	パーセント
はい	223	33.1
いいえ	400	59.3
無回答	51	7.6
合計	674	100.0

表 15. いじめの当時の気持ち（いじめられる子に悪い点がある）の度数分布表

いじめの当時の気持ち （いじめられる子に悪い点がある）	度数	パーセント
はい	405	60.1
いいえ	233	34.6
無回答	36	5.3
合計	674	100.0

表 16. いじめの当時の気持ち（いじめに参加しなければいじめられる）の度数分布表

いじめの当時の気持ち （いじめに参加しなければいじめられる）	度数	パーセント
はい	250	37.1
いいえ	377	55.9
無回答	47	7.0
合計	674	100.0

表 17. いじめの当時の気持ち（いじめられたから誰かをいじめたくなった）の度数分布表

いじめの当時の気持ち （いじめられたから誰かをいじめたくなった）	度数	パーセント
はい	80	11.9
いいえ	539	80.0
無回答	55	8.1
合計	674	100.0

事もあり嫌がらせと無視と暴力の数値が全体的に低いものの無視は小学校時代・中学校時代を含めて最も多かった事が上記のいじめに関する内容

の度数分布表から見る事が出来る。

最後にいじているときの気持ちについての度数分布表の分析である。

いじめにおける加害者側がいじめの際に抱える気持ちとしては上記の度数分布よりいじめられている子に理由があるからという客観的な気持ちが最も多くその次に単なる遊びだと思っていたが多くいじめなければ自分がいじめを受けるという人が多いと分かる。

7. 結論と考察

以上の分析結果及び度数分布表からわかる結論として「いじめは中学時代で傍観者が最も多く、いじめの内容は主に暴力が多いと共にいじめを行っている被害者に対して行っている加害者がいじめを行っているときの気持ちは被害者に対していじめを行っている感覚を持つことなくいじめを行っている」という仮説に対して、いじめが最も多いと分かるのは小学校時代で、いじめの内容はあからさまな無視や嫌がらせが多いと共に傍観者が最も多いという事が分かり、いじめている時の気持ちは意外にもいじめられる子に理由があるという客観性を感じさせる回答であったことに驚くと共に、いじめ全体の件数は増加していても、その中のいじめに占める割合は小中学校が多く、高校になるにつれ減少する事が分かった。こうなる理由として考えられるのは、いじめは先行研究にあった通り、無差別性はなく理由がほとんどに存在するという事に関係すると共に、小学校時代では精神状態及び人に対する価値観などの優劣に敏感である事と、他者の気持ちを考える力が欠如しやすいためいじめが起きやすい環境にあり、高校になるにつれ、その環境的な要因は小さくなっていくためだと考えられるが、いじめの無差別性については、いじめを行っている際の心情にいじめたからいじめたいと答えている人もいるため一概に先行研究のいじめの無差別性が当てはまるとは言えないものの、いじめには人為的な環境や人の心情によって大きく変化するもので、対象者に悪い点があった事がいじめを行っている際の心情と

考えると先行研究の孤立や反感などいじめられるきっかけを被害者が作ってしまっている場合もあると考えられ、それがいじめの特性といじめ内容の多岐化につながっていると考えられるためである。また、ドラマや実際に自分たちの想像していたいじめの現状とは大きくかけ離れていた結果となり、いじめにおけるきっかけや特徴が見えてきたことで、よりいじめの起きにくい環境づくりをしていく事が必要ではないかと考えられた。

【引用文献】

神村栄一、1996、「いじめっ子が「ムカつく」いじめられっ子の特徴といじめの内容いじめ動機を喚起する被害生徒の特長」『日本教育心理学会発表論文集第38回総会発表論文集』505臨床2 - PE 2。

【謝辞】

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「『モノグラフ小学生ナウいじめの残したもの』2002（ベネッセ教育総合研究所・ベネッセコーポレーション）」の個票データの提供受けました。心から感謝申し上げます。

放課後の時間の使い方に関する研究

都築勇仁

はじめに

この論文では、放課後の時間の使い方をテーマに、学校段階によっての放課後の時間の使い方にはどのような違いがあるのかという問いを立て考察を行った。仮説として、学校段階が上がるにつれて、娯楽（睡眠や遊びなど）に費やす時間が減り、逆に、勉強や習い事など将来の就職に関わってくるようなことに費やす時間が増えてくるとし

た。データをもとに、学校段階（小、中、高）によって放課後の時間の使い方はどのように変わってくるのかについて分析を行った。その中で、睡眠、遊び、勉強、習い事に注目して見ていき、それぞれの学校段階にどのような違いや特徴があるのかを詳しく分析していった。

第1章 睡眠と学校段階

まず、睡眠の分析では1日の睡眠時間のデータを使い分析を行った。

表1は、1日の睡眠時間を学校段階ごとに区分してまとめた表である。値に下線が引いてある部分は、それぞれの学校段階の全体に対する値の割合（％）が2桁のものである。この表からわかることとして、小学校から高校にかけて学校段階が上がるにつれて、平均的に睡眠時間が少なくなっているということである。表の値に下線が引いてある部分を見てもそれが顕著に表れていることがわかるだろう。他には、小学校では、割合（％）の散らばりが少なく下線が引いてある値を中心にある程度まとまっている。一方、中学校や高校では、

下線が引いてある値には割合（％）がまとまっているがそれ以外は小学校のようなまとまりはなく散らばっていることがわかる。

第2章 遊びと学校段階

次に、遊びの分析では3種類のデータを使い分析を行った。

表2は、屋外遊び、室内遊び、ゲームを放課後にやっている人の人数をまとめた表である（かっこの割合（％）は、それぞれの学校段階の全体に対してのもの）。この結果からわかることとして、小学校は、中学校や高校に比べて放課後の時間を遊びに費やしている人が多いことがわかる。特に、友達と遊ぶ割合（％）は小学生が極端に高いことがわかる。他には、家でゲームをする人の割合（％）学校段階関わらず全体的に高いことがわかる。

第3章 勉強と学校段階

次に、勉強の分析は学校の宿題をする、学校の宿題以外の勉強をする、塾の3つのデータを使い分析を行った。

表1 学校段階ごとの1日の睡眠時間

1日の睡眠時間	75-149分	150-224	225-299	300-374	375-449	450-524	525-599	600-674	675-749	750-824	825-899	総計
小学校	2(0.1%)	17(0.7%)	1(0%)	10(0.4%)	145(5.6%)	1053(40.5%)	1247(47.9%)	120(4.6%)	7(0.3%)	1(0%)	0(0%)	2603
中学校	9(0.3%)	38(1.1%)	43(1.2%)	284(7.9%)	1206(33.6%)	1551(43.2%)	399(11.1%)	54(1.5%)	7(0.2%)	1(0%)	0(0%)	3592
高校	7(0.4%)	22(1.2%)	72(4.0%)	443(24.3%)	746(40.9%)	453(24.9%)	61(3.3%)	12(0.7%)	2(0.1%)	1(0.1%)	3(0.2%)	1822
総計	18	77	116	737	2097	3057	1707	186	16	3	3	8017

表2 学校段階ごとの屋外遊び、室内遊び、ゲームを放課後にやっている人の割合

	小学校	中学校	高校
友達と屋外での遊び	464(17.8%)	207(5.8%)	55(3.0%)
友達と室内での遊び	525(20.2%)	240(6.7%)	74(4.1%)
家でゲーム	742(28.5%)	700(19.5%)	251(13.8%)

表3 学校段階ごとの宿題に費やす時間

学校の宿題をする	しない	5分	10分	15分	30分	1時間	2時間	3時間	4時間	4時間以上	無回答	総計
小学校	37(1.4%)	86(3.3%)	250(9.6%)	470(18.1%)	976(37.5%)	678(26.0%)	74(2.8%)	7(0.3%)	0(0%)	1(0%)	24(0.9%)	2603
中学校	406(11.3%)	127(3.5%)	288(8.0%)	439(12.2%)	1112(31.0%)	926(25.8%)	216(6.0%)	27(0.8%)	3(0.1%)	5(0.1%)	43(1.2%)	3592
高校	375(20.6%)	45(2.5%)	91(5.0%)	125(6.9%)	428(23.5%)	508(27.9%)	178(9.8%)	37(2.0%)	5(0.3%)	3(0.2%)	27(1.5%)	1822
総計	818	258	629	1034	2516	2112	468	71	8	9	94	8017

表3は、放課後学校の宿題をするか、するならば、どのくらいの時間するかについての表である。値に下線が引いてある部分は、それぞれの学校段階の割合（％）が上位3番目までのものである。この表からわかることとして、高校は、小学校や中学校に比べて放課後の時間を学校の宿題に費やす人が少ないことがわかる。逆に、小学校は、しないと答えている人が1.4％と極端に他の2つの段階と比べて低いことがわかる。他には、宿題をする時間は、線が引いてあるところを見てわかる通り学校段階によってはあまり変化がないことがわかる。

表4は、放課後学校の宿題以外の勉強をするか、するならば、どのくらいの時間するかについての表である。値に下線が引いてある部分は、それぞれの学校段階の割合（％）が上位3番目までのものである。この表からわかることとして、全体的な傾向をしてはどの学校段階も似ているように読

み取れる。しかし、その中で、学校の宿題以外の勉強に放課後の時間を費やす人が、高校は極端に少ないことがわかる。

表5と表6は、塾に通っているかと通っていれば1回あたりどのくらいの時間塾で勉強しているかについての表である。値に下線が引いてある部分は、それぞれの学校段階の割合（％）が上位3番目までのものである。この表からわかることとして、まず、塾に通っている人は、中学校が49.9％と約2人に1人の割合で通っていることがわかる。逆に、高校は、17.7％と他の2つに比べて極端に低いことがわかる。そして、塾の1回あたりの時間の方からは、小学校は、他の2つに比べて少し1回あたりの時間が少ない。しかし、どの学校段階も最大値を見ると、1時間半に最大値があることがわかる。

表7は、学校の宿題、学校の宿題以外の勉強、塾を放課後にやっている人の人数をまとめた表で

表4 学校段階ごとの宿題以外の勉強をする時間

学校の宿題以外の勉強をする											
	しない	5分	10分	15分	30分	1時間	2時間	3時間	4時間	4時間以上	無回答
小学校	607(23.3%)	96(3.7%)	213(8.2%)	323(12.4%)	668(25.7%)	415(15.9%)	142(5.5%)	61(2.3%)	15(0.6%)	30(1.2%)	33(1.3%)
中学校	611(17.0%)	72(2.0%)	138(3.8%)	266(7.4%)	699(19.5%)	925(25.8%)	534(14.9%)	203(5.7%)	61(1.7%)	39(1.1%)	44(1.2%)
高校	766(42.0%)	37(2.0%)	60(3.3%)	79(4.3%)	293(16.1%)	380(19.8%)	144(7.9%)	48(2.6%)	6(0.3%)	6(0.3%)	23(1.3%)
総計	1984	205	411	668	1660	1700	820	312	82	75	100

表5 学校段階ごとの通塾の有無

塾有無				
	行っている	行っていない	無回答	総計
小学校	936(36.0%)	1645(63.2%)	22(0.8%)	2603
中学校	1794(49.9%)	1770(49.3%)	28(0.8%)	3592
高校	323(17.7%)	1489(81.7%)	10(0.5%)	1822
総計	3053	4904	60	8017

表6 学校段階ごとの塾での勉強時間

学習塾の1回あたりの時間											
	30分	1時間	1時間半	2時間	2時間半	3時間	3時間半	4時間	4時間以上	無回答	総計
小学校	21(2.2%)	194(20.7%)	252(26.9%)	171(18.3%)	78(8.3%)	58(6.2%)	42(4.5%)	43(4.6%)	43(4.6%)	34(3.6%)	936
中学校	2(0.1%)	92(5.1%)	468(26.1%)	444(24.7%)	354(19.7%)	267(14.9%)	53(3.0%)	41(2.3%)	41(2.3%)	32(1.8%)	1794
高校	1(0.3%)	18(5.6%)	101(31.3%)	98(30.3%)	40(12.4%)	40(12.4%)	8(2.5%)	6(1.9%)	7(2.2%)	4(1.2%)	323
総計	24	304	821	713	472	365	103	90	91	70	3053

ある（かっこの割合（％）は、それぞれの学校段階の全体に対してのもの）。この表からわかることとして、高校は、学校の宿題以外の勉強が56.7％と他の2つと比べて約20％も低いことがわかる。他にも、塾の割合も他に比べて極端に低いことがわかる。学校段階で見た時に、高校は、割合が低く勉強への意欲があまりないように読み取ることが出来る。

第4章 習い事と学校段階

最後に、習い事では2つのデータを使い分析を行った。

表8と表9は、習い事をしているかと、していれば1回あたりどのくらいの時間習い事を行っているのかについての表である。値に下線が引いてある部分は、それぞれの学校段階の割合（％）が上位3番目までのものである。この表からわかることとして、学校段階が上がるにつれて、習い事を行っている人が少なくなっていくことがわか

る。特に、小学校は、習い事を行っている人が他の2つに比べて圧倒的に多いことがわかる。他には、習い事1回あたりの時間は、どの学校段階も似たような割合であることがわかる。

第5章 考察

これらの分析から考察を行うと、まず、仮説で立てていた学校段階が上がっていくにつれて娯楽（睡眠や遊びなど）に費やす時間が減っていき、逆に勉強や習い事など将来の就職に関わってくるようなことに費やす時間が増えていくというのは、娯楽への時間は学校段階が上がるにつれて減っていったが、勉強などへの時間は増えてはいなかった。これは、勉強の方では、小学校や中学校では宿題が出ていて強制的に放課後の時間を勉強にあてなくてはいいけないが、高校では、宿題が出ていないことが多く自主的な勉強が主になっているため勉強に費やす時間が増えなかったのだと考えられる。習い事では、中学校からは部

表7 学校段階ごとの学校の宿題、学校の宿題以外の勉強、塾に通うをしている人の割合

	小学校	中学校	高校
学校の宿題	2542(97.7%)	3143(87.5%)	1420(77.9%)
学校の宿題以外	1963(75.4%)	2937(81.8%)	1033(56.7%)
塾	936(36.0%)	1794(49.9%)	323(17.7%)

表8 学校段階ごとの習い事の有無

	している	していない	無回答	総計
小学校	2069(79.5%)	523(20.1%)	11(0.4%)	2603
中学校	1400(39.0%)	2158(60.1%)	34(0.9%)	3592
高校	395(21.7%)	1416(77.7%)	11(0.6%)	1822
総計	3864	4097	56	8017

表9 学校段階ごとの習い事1回あたりの時間

習い事の1回あたりの時間	30分	1時間	1時間半	2時間	2時間半	3時間	3時間半	4時間	4時間以上	無回答	総計
小学校	127(6.1%)	701(33.9%)	374(17.4%)	359(17.4%)	119(5.8%)	109(5.3%)	32(1.5%)	30(1.4%)	96(4.6%)	121(5.8%)	2069
中学校	181(12.9%)	371(26.5%)	276(19.7%)	269(19.2%)	92(6.6%)	68(4.9%)	24(1.7%)	19(1.4%)	40(2.9%)	60(4.3%)	1400
高校	45(11.4%)	101(25.6%)	62(15.7%)	87(22.0%)	27(6.8%)	33(8.4%)	8(2.0%)	7(1.8%)	8(2.0%)	17(4.3%)	395
総計	353	1173	713	715	238	210	64	56	144	198	3864

活動が出来る。そのため、小学校にやっていた習い事が中学校や高校の部活動にあったらそっちに入る人が多くなるからであると考えられる。そして小学校の頃は親がいろいろな経験をさせるために強制的に習い事をやらせていることがある。しかし、中学校、高校となると授業の時間が長くなり部活動の時間が出来たりなど、小学校に比べて放課後の時間がそもそも短くなり習い事に費やす時間が無くなるというのも習い事の時間が増えなかった要因になっていると考えられる。逆に、娯楽の時間が学校段階が上がっていくにつれて減っていつているのは、この放課後の時間が短くなっていくのが1つの要因となっているとも考えられる。次に、勉強に注目して見た時に、中学校が1番勉強の意欲が分析から読み取れ、逆に高校からは1番意欲がみられなかった。これは、高校受験と大学受験の方法の違いが大きな要因となっていると考える。高校受験では、受験方法は筆記試験がほとんどである。これは、まず高校に進学と思っている人は筆記試験ということから勉強をすることが必要となってくる。自分が志望している高校に入るためには、その分その高校のレベルまで学力を上げて筆記試験に合格しなくては志望校には入ることはほとんどできないのだ。だから、中学校が一番勉強への意欲があると考えられる。一方で、大学受験では、受験の方法がいくつかある。筆記試験もちろんあるがそれだけでなく指定校推薦やAO入試などの筆記試験を受けなくても入れる方法があるのだ。だからこそ、自分の得意な受験方法を選択すればいいので筆記試験を受ける人だけが勉強への意欲があり、その他の受験方法の人は勉強にあまり勉強に意欲がないため、高校は1番勉強への意欲が見られないのだと考えられる。最後に、勉強や習い事をやっている人の使った時間を見た時に、どの学校段階でも同じような時間を行っていて学校段階によって違いがあまり見られなかった。これは、塾や習い事であっ

たら1コマ何時間の授業や何時～何時までといったように学校段階ごとに時間が変わるなどがあるのとは内容の出来よりも時間で区切られていることが多いため同じような傾向が見られたのだと考える。宿題などの時間も1時間くらいなど決まった時間で終わるような内容の宿題を先生が出しているから似たような傾向になっているのだと考えられる。

最後に

結論として、学校段階によつての放課後の時間の使い方をまとめると、まず、睡眠時間や遊び、習い事は学校段階が上がるにつれて減っていく。それは、学校の授業時間が学校段階があがるにつれて増えたり部活動に入ったりなど放課後の時間が減っていくことからそれに費やす時間が無くなっていると考えた。そして、勉強は、小学校や中学校は学校で宿題が出ることが多いことから放課後勉強をしている人が多い。特に、中学校では、今の日本社会は、高校受験をする人がほとんどであり、高校受験では、筆記試験で合否を決めている高校がほとんどである。そのため、勉強して学力を上げなくては志望する高校に入れないことから、放課後勉強に時間を費やしている人が多いのだと考えた。逆に、高校では、宿題もあまり出ず、大学の受験方法も指定校推薦やAO入試などの筆記試験以外の方法があるため、放課後勉強に費やす時間が小学校、中学校に比べて少ないのだと考えた。

【謝辞】

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「放課後の生活時間調査、2008」（ベネッセ教育総合研究所）の個票データの提供を受けました。心から感謝申し上げます。

【参考文献】

谷山和成、2014、「放課後の生活時間調査」、ベネッセ教育情報、(2024年7月10日アクセス、2014_houkago_all.pdf (benesse.jp))。

谷山和成、2015、「放課後の生活時間調査」、ベネッセ教育情報、(2024年7月10日アクセス、file_all.pdf (benesse.jp))。

放課後NPOアフタースクール、2023、「小学生の放課後の過ごし方に関する独自調査結果発表」、(2024年7月10日アクセス、<https://npoafterschool.org/archives/news/2023/11/40549/>)。

松村祥子、2014、「子どもの生活時間に関する調査研究」、一般財団法人、(2024年7月10日アクセス、https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000184127.pdf)。

幸せを感じるのに必要なこと**一配偶者がいて子どもがいる女性が幸せを感じるのに必要なことは何なのかー**

照井 彪吾

第1章：はじめに**1.1. はじめに**

本論では現在子どもと配偶者がいる女性が幸せを感じるのにはどういったことが必要となるのかについて明らかにすることを目的とする。

1.2. 研究の目的

昨今の日本では結婚というものにたいしてあまりプラスイメージを持つのが難しくなっている現

状で、それと同時に一人のほうが気楽だという人の声も聞いたことがある。ほかにも、結婚にプラスイメージを持たず、一人のほうが私生活で自由がききやすいという考えを持っている人もいと考えられる。しかし、そんな社会でも結婚をしている人はいて、一人が楽だと考えている人でも、孤独や、寂しさに耐えきれず相手を探してもしも出会うことができれば結婚をするのかもしれない。そして友達のなかにも近いうちに結婚をするものもあらわれるのかもしれない。一見今まで話してきたことになんの意味があるのか問いたくなるだろうが前述したことが何よりも今回の調査の目的に関係している。というのも、もしも結婚をし、子どもを授かったとき、世間一般ではどうしても女性の方が家庭内における負担が男性よりも多い社会になっている現在の状態では結婚という幸せなスタートを切った人生のセカンドシーズンが見事に破綻してしまうかもしれない。また女性たちがろくでもない男に振り回されてしまう可能性もないわけではない。だからこそ、今この段階で結婚をして現在子どもが一人以上いて、なおかつ配偶者がいる女性の幸せが何かを探求することにより、女性がなにに対して満足し、不満を持ち、幸せを感じるのかを知りそれを今後の人生に生かしたい。もちろん友達や社会のためにも役立てたい。これが今回の研究目的だ。

1.3. 仮説

何に満足し、不満を感じるのか。そして幸せを感じるのかを明らかにするにあたり、仮説を3つ立てた。まず、対象となるのは子どもが1人もしくは1人以上いて、配偶者がいる女性だ。次にこの女性たちが感じる幸福というのは家庭に関する幸福、たとえば家族といると楽しいといったことや、子ども、もしくは夫といるのが楽しいといった幸福、そしてもう一つは個人に関する幸福、これはおいしいものを食べることや、おしゃれをす

ること、そして一人でいるほうが楽しいといった内容のことだ。そしてこの2つの幸福を本論ではそれぞれを「家庭的な幸福」「個人での幸福」と定義する。

さて、これらを踏まえたうえでの仮説は3つである。1つ目の仮説は女性が家庭的な幸福を感じるのには夫の家庭的な協力が最も重要視されるのではないか。2つ目は夫への満足度が高ければ家庭的な幸福を感じやすく、その逆に不満のほうが高い場合は家庭よりも個人での幸福を感じやすいのではないのか。3つ目は夫に対する不満として一番多いのは、やはり家事、特に育児などに非協力的なことに対しての不満ではないのか。この

3つが今回立てた仮説だ。

第2章：調査内容の確認及び調査結果

2.1. 調査対象および調査方法

研究対象となるのは子どもが1人もしくは1人以上いて、配偶者がいる女性だ。また、今回の調査で使用するデータは「明治安田総合研究所」の「女性の幸せに関する意識調査, 2011」だ。

分析方法は前述したデータの対象となって女性の中から対象にしている人々を絞り、エクセルのピボットテーブルを使用し集計表を使いながらデータを比較する。集計方法は使用する質問の大半が複数回答方式の質問なのでそれぞれの質問に

表 1 「Q27 夫に対する満足度」

解答番号	回答数	回答の割合
1 満足	216	16.3%
2 まあ満足	655	49.4%
3 どちらともいえない	195	14.7%
4 あまり満足していない	149	11.2%
5 満足していない	110	8.3%
総計	1325	100.0%

表 2 「Q28 夫のどこに満足しているのか」

質問番号	回答数	対象者の合計のうちの回答割合
合計 / q28_1 家事に協力的	229	17.3%
合計 / q28_2 育児・教育に協力的	231	17.4%
合計 / q28_3 経済力がある	162	12.2%
合計 / q28_4 会話と一緒に行動する時間を持ってくれる	172	13.0%
合計 / q28_5 一緒にいて楽しい	144	10.9%
合計 / q28_6 性格や価値観が合う	140	10.6%
合計 / q28_7 好み・趣味が合う	59	4.5%
合計 / q28_8 思いやりや愛情が感じられる	348	26.3%
合計 / q28_9 容姿が気に入っている	7	0.5%
合計 / q28_10 私の親のことを大切にしてくれる	59	4.5%
合計 / q28_11 その他【 】	27	2.0%

表 3 「Q29 夫のどこが不満なのか」

質問番号	回答数	対象者の合計のうちの回答割合
合計 / q29_1 家事に非協力的	54	4.1%
合計 / q29_2 育児・教育に非協力的	31	2.3%
合計 / q29_3 経済力が乏しい	72	5.4%
合計 / q29_4 会話と一緒に行動する時間を持ってくれない	26	2.0%
合計 / q29_5 性格や価値観が合わない	122	9.2%
合計 / q29_6 好み・趣味が合わない	51	3.8%
合計 / q29_7 思いやりや愛情が感じられない	86	6.5%
合計 / q29_8 容姿が不満	6	0.5%
合計 / q29_9 私の親のことを大切にしてくれない	10	0.8%
合計 / q29_10 その他【 】	27	2.0%

おける回答がそれぞれの程度選択されているかを選択肢ごとに合計し、その合計を比較する。そして、その選択にどういった傾向があるのかなどを見ていく。また、比較するために出した値をもとに百分率と図表を作成し、視覚的にわかりやすく比較する。主に使用した質問は「Q1」あなたに配偶者はいますか。「Q3」お子さんの人数をお答えください。「Q21」あなたが普段の生活で「幸せ」を感じるのはどのようなときですか。当てはまるものを3つ以内でお選びください。「Q22」あなたの「幸せ」のために、必要なものは何だと思いますか。当てはまるものをすべてお選びください。さらにその中で最も必要だと思うものを1つお選びください。「Q27」夫に対するあなたの満足度はどの程度ですか。当てはまるものを1つお選びください。「Q28」夫にたいして満足している理由は何ですか。次のうちから2つ以内でお答えください。「Q29」夫にたいして不満な理由は何ですか。次のうちから2つ以内でお答えください。「Q37」女性が子育てをスムーズに行うためには、何が必要だと思いますか。優先度が高いと思うものを3つお選びください（複数回答）。これらをもとに比較していく。

2.2. 分析結果

(1)「Q27夫に対する満足度」に関する質問の分析結果

分析で判明したことは今回使用したデータでは夫にたいして満足している人が多かった。具体的には表1を見ていただければわかるが、回答番号2の「まあまあ満足している」が49.4%、1の「満足」は16.3%、回答番号3及び4の「どちらとも言えない」「あまり満足していない」がそれぞれ14.7%となり、最後に5番の満足していないが8.3%だった。このことから全体的にまあまあ満足している人の割合が一番多いことが分かる。

(2)「Q28夫のどこに満足しているのか」に関する質問の分析結果

この質問では夫のどんなところに満足しているのかを質問したもので最も多かった回答は表2を見ていただければわかるが8の「思いやりや愛情が感じられる」2の「育児・教育に協力的」1の「家事に協力的」の順番それぞれ26.3%、17.4%、17.3%となっている。予想では家事や育児が一番だと思っていたがそういったものを総合して思いやりと考えられることもできるため、あながち外れてもいないと考えられる。

(3)「Q29夫のどこが不満なのか」に関する質問の分析結果

Q29ではQ28に比べて回答者が少ないが回答が最も多かったのは5の「性格や価値観が合わない」7の「思いやりや愛情が感じられない」3の

表4 「Q37女性が子育てをスムーズに行うのに必要なことは何なのか」

質問番号	回答数	対象者の合計のうちの回答割合
合計 / q37_1 夫の協力	968	73.1%
合計 / q37_10 子育てのための経済的なゆとり	562	42.4%
合計 / q37_2 家庭の協力	423	31.9%
合計 / q37_9 子育てのための時間的なゆとり	408	30.8%
合計 / q37_8 保育所・幼稚園の整備	320	24.2%
合計 / q37_4 職場の支援制度の充実	201	15.2%
合計 / q37_3 親の協力	198	14.9%
合計 / q37_6 育児休暇等の制度を利用しやすい職場環境	195	14.7%
合計 / q37_7 子育て等の理解と協力	190	14.3%
合計 / q37_11 地域等の子育てサポート機能	121	9.1%
合計 / q37_5 上司や同僚等の理解や協力	102	7.7%
合計 / q37_12 その他【 】	17	1.3%
合計 / q37_13	5	0.4%

「経済力が乏しい」の順でそれぞれ9.2%、6.5%、5.4%となっている。表3にはそのほかの回答に対しての回答率も書いてあるので見ていただきたい。不安は家事や育児をしないことに向けられると考えていたが、性格や価値観に対する不満が最も多かった。この結果はQ28のように総合して考えることもできるが、性格や価値観が合わないという状態はおそらく思いやりや愛情を感じられないのとは別の原因で発生している可能性があるため、やはり性格や価値観が合わないのは思いやりとは別の問題がありその結果だと考えられる。

（3）「Q37女性が子育てをスムーズに行うのに必要なことは何なのか」に関する質問の分析結果

この質問にたいしての最も多かった回答の上位3つは回答番号1の「夫の協力」（73.1%）回答番号10の「子育てのための経済的なゆとり」（42.4%）最後に回答番号2の「家族の協力」（31.9%）となった。この質問に関しての図表は回答が多い順で並べているため、ぜひ見ていただいたうえて上位3つ以外で何が必要とされているのか確認していただきたい。また、この調査結

果及び数値からもわかることとしては、やはり子育てには夫の協力が必要不可欠であるということだ。しかし、見落としていた点もあった。それは子育てに協力的な夫がいくらいても子育てをするためにかかる金銭面をカバーできる経済力が必要になるということだ。

（4）「Q21普段の生活で「幸せ」を感じるのはどのような時か」に関する質問の分析結果

Q21でもっとも多かったのは回答番号1「家族団らんのとき」（61.0%）回答番号3「子どもがいるとき」（41.5%）最後に13「美味しいものを食べているとき」（34.5%）だった。しかしこれは全体の合計から出た順であり、満足している人と、不満を持つものではそれぞれ回答が変わると考えられるため、次はQ27の質問1と2に回答した人達にフィルターをかけてみるとそれぞれ、1・3・13の順で全体の合算と変わりなかった。次に4と5に回答した不満がある人たち合計659人だけで見ると3・5・13という順になり13の「美味しいものを食べているとき」の数値は(6.8%)同じように入っていたが回答番号3「子

表5 「Q21 普段の生活で「幸せ」を感じるのはどのような時か」

質問番号	回答数	対象者の合計のうちの回答割合
合計 / q21_1 家族団らんのとき	808	61.0%
合計 / q21_3 子供といるとき	550	41.5%
合計 / q21_13 おいしいものを食べる時	457	34.5%
合計 / q21_5 1人でのんびりしているとき	451	34.0%
合計 / q21_2 パートナー（夫・恋人）といるとき	218	16.5%
合計 / q21_11 友人等といるとき	214	16.2%
合計 / q21_15 ショッピングをしているとき	169	12.8%
合計 / q21_9 趣味（インドア系）の時間	169	12.8%
合計 / q21_8寝ているとき	143	10.8%
合計 / q21_10 趣味（アウトドア系）の時間	98	7.4%
合計 / q21_4 ベットといるとき	76	5.7%
合計 / q21_14 お酒を飲んでいるとき	67	5.1%
合計 / q21_7 テレビを見ているとき	61	4.6%
合計 / q21_19 その他【 】	34	2.6%
合計 / q21_6 家事をしているとき	28	2.1%
合計 / q21_18 仕事の成果が出たとき	26	2.0%
合計 / q21_16 仕事をしているとき	23	1.7%
合計 / q21_12 インターネットでの交流・情報交換	21	1.6%
合計 / q21_20 幸せを感じる時はない	8	0.6%
合計 / q21_17 職場でのランチや休憩時間	0	0.0%

どもといるとき」(9.0%)が最も多くその次が5の「1人でのんびりしているとき」(8.8%)だった。この結果から判明したことは家族団らんや夫といるときよりも「子ども」といときのほうが幸せを感じるらしい。これは夫に不満があるからこそ出た結果なのかもしれない。そして美味しいものを食べているときという回答よりも「一人でのんびりしているとき」という回答のほうが多かったのはおいしいものを食べることも家事などから離れてのんびりしたいという考えなどがあるのかもしれない。ちなみに3のどちらでもないに回答した人達は1・5・3の順番だった。

(5)「Q22「幸せ」を感じるのに必要なことは何だと思いますか。当てはまるものすべてをお選びください」に関する質問の分析結果

最後にQ22の質問で最も多かった回答は5「健康」(31.8%)次に1「良きパートナー」(22.0%)3「お金」(14.8%)という順になっている。そのほかの選択肢とそれに対しての各回答の数値は表6に載せているので見ていただきたい。しかし、この表に書いてある数値は全体の合計で先ほどの

「Q21」のときと同じように満足している人と不満がある人では違うと考えられるためここには図表は載せないがそれぞれ分けてみる。満足している人たちは5「健康」1「良きパートナー」2「子ども」という順で、不満がある人たちは5「健康」3「お金」2「子ども」という順番になり、このことから満足していても、不満を持っていたとしても個人の幸せのために最も必要なことは健康となり、不満があっても夫に満足していてもともに子どもも入っていることから健康と子どもは幸せのために最も必要なこととして判明したといえる。

第3章 考察

今までの分析を通して明らかになったことは仮説で書いたように満足度が高い人達は夫のどこに満足しているのかと聞かれれば家事や育児をするところと答え、そのほかにも幸せに必要なことでは良きパートナーと答えるほど夫の行動は影響するといえる。しかし、不満をもつ人たちは家事や育児に対しての不満も持っているがそれよりも性格や価値観が合わないことや思いやりや愛情が感じられないこと、そして経済力などへの不満が高

表6 「Q22「幸せ」を感じるのに必要なことは何だと思いますか。(複数回答)」

解答番号	回答数	対象者の合計のうちの回答割合
合計 / q22.2_5 健康	422	31.8%
合計 / q22.2_1 良きパートナー (夫・恋人)	292	22.0%
合計 / q22.2_3 お金	196	14.8%
合計 / q22.2_2 子ども	195	14.7%
合計 / q22.2_14 平和で安全な世界	75	5.7%
合計 / q22.2_8 安定した仕事があること	36	2.7%
合計 / q22.2_7 自由	25	1.9%
合計 / q22.2_4 安定して住める世帯	22	1.7%
合計 / q22.2_11 友人・知人との良い関係	15	1.1%
合計 / q22.2_13 様々な人生経験	11	0.8%
合計 / q22.2_18 わからない	10	0.8%
合計 / q22.2_6 趣味・レジャー	8	0.6%
合計 / q22.2_17 その他【 】	6	0.5%
合計 / q22.2_10 夫や子どもの社会的地位	4	0.3%
合計 / q22.2_9 仕事での成功	4	0.3%
合計 / q22.2_15 良い自然環境	3	0.2%
合計 / q22.2_12 知識や教養	1	0.1%
合計 / q22.2_16 良い伝統・文化	0	0.0%

かったことから家事や育児だけに対して、必ずしも最も不満がたまるわけではなく、その他の要因として例えば家事や育児にあまり協力的でないだけでなく、そのほかことであまりそりが合わないといったことなども含めて総合的に価値観や性格が合わないという結論に至り、こういった回答になったと考えることも可能であると思われる。さらに、こういったことを踏まえうえて普段の生活で幸せを感じるのとはという質問には満足度が高い人たちは仮説通り「家族団らんとき」という選択肢が最も多く、その次に「子どもといるとき」最後に「美味しいものを食べているとき」という順になっていて、「家族的な幸福」にたいしての回答が多かったと思われる。それに対して不満がある人たちは「子どもといるとき」という回答が最も多かったがその次に「一人でのんびりしているとき」という回答が多く、最後は満足度が高い人たちと同じで「美味しいものを食べているとき」という回答が多かった。このことから「個人的な幸福」つまり、家族を抜きにした幸せも仮説通り高かったが、子どもという家族を含めた幸せのほうが高かったことから、家族全員ではなくても子どもと一緒にいる「家族的な幸福」のほうが「個人的な幸福」よりも高く、重要であることが判明した。このことに関してはQ22の質問及び分析からもうかがえることなので子どもという存在は夫の行動とは別に母親という存在である女性にとっては重要な存在であるのかもしれないということが判明した。そういった意味では改めて子どもの存在の大切さと偉大さを再確認できたと考えている。結果として、仮説の半分は正しかったが、3つ目に関しては家事や育児だけが不満のすべてではないということが判明したため、とても良い結果を得られたと考えられる。そして夫だけでなく、子どもの存在も重要であるということが明らかになった。

【謝辞】

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「女性の幸せに関する意識調査、2011」（明治安田総合研究所）の個票データの提供を受けました。心から感謝申し上げます。

【参考文献】

明治安田生活福祉研究所、2011、『女性の幸せに関する意識調査』結果概要』。

改革開放前後の労働者の待遇水準の変化

彭 震宇

1. はじめに

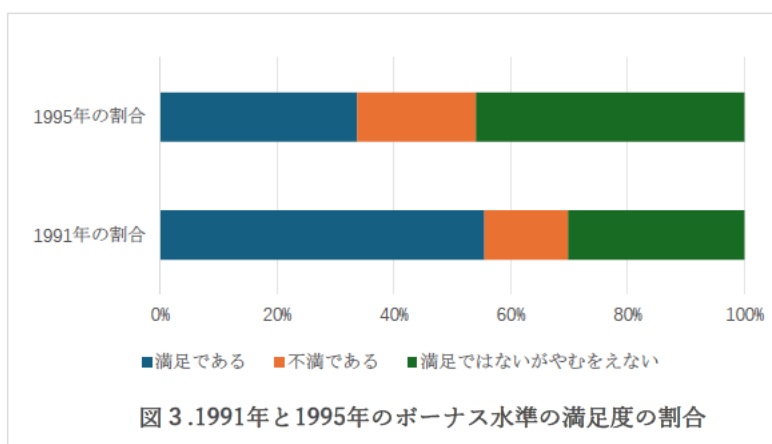
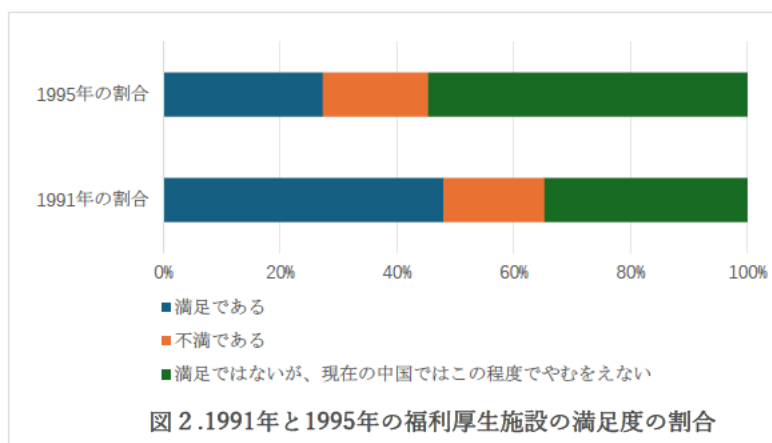
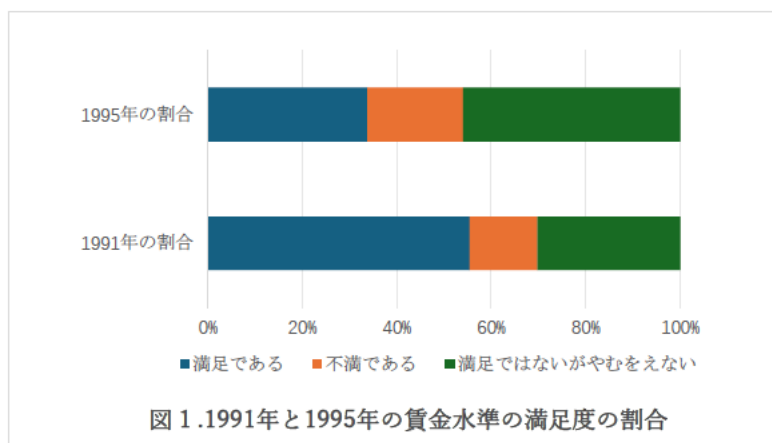
中国は国の経済を発展するために前世紀の80年代から「改革開放」という政策を作った。この時期に中国は急速に発展し、今では世界の第二の経済大国になった。そして、この政策を享受した労働者たちの賃金やボーナスなどの待遇水準はどんな変化があるか、データを分析して明らかにする。

2. 先行研究

中華人民共和国中央人民政府の報告は中国のGDPは1991年から1995年まで約4倍の伸びの成長率であった。そして、中国の労働者の収入は改革開放の前に増長速度が遅いが、改革開放後の時期には改革開放以前の百倍の増長速度に増加している。この報告から見ると、中国の労働者たちの待遇水準は改革開放後から顕著に上昇しているだろう。

3. 仮説

仮説1「時期によって多数の労働者たちは自分の賃金水準が満足ではない。」



仮説2「時期によって多数の労働者たちは自分の福利厚生施設の満足度水準が満足ではない、そして中国の待遇水準はもっと良い程度が欲しい。」

仮説3「改革開放以降の労働者たちの物質的な要求が増加している。」

4. 方法

仮説を検証するために本研究では東京大学社会科学研究所のデータ「中国機械工業における労務管理と労働者の職務意識に関する調査、1991・1995」を用いる。

5. 分析結果

まず、仮説1を検証する。図1は1991年と1995年の労働者たちが自分の賃金水準に満足しているかを示したものである。図をみると、1991年の「自分の賃金水準は満足である」という労働者の割合は1995年の労働者よりも多い。また、「低すぎる」と「低いと思うが、やむをえない」という満足度の労働者の割合が1991年に比べて多くなる。つまり、1991年から1995年まで労働者たちは自分の賃金水準は満足ではない状況が明らかになった。

次は、仮説2である。図2は1991年と1995年の労働者たちは福利厚生施設の満足度の図である。図を見ると1991年から1995年まで労働者たちは福利厚生施設の満足度が「満足である」から「満足ではないが、現在の中国ではこの程度でやむをえない」に変化した。そして、労働者たちは満足ではないことだけでなく、「現在の中国ではこの程度でやむをえない」という気持ちがある。つまり、1995年の労働者たちは福利厚生施設の満足度が満足ではなくて、中国の待遇水準をもっと高くして欲しいと考えていることが明らかになった。

最後の仮説3については、図3の労働者たちのボーナス水準の満足度の図に示したとおりである。図を見ると、1991年から1995年まで労働者た

ちはボーナス水準の満足度が満足であるから満足ではない状況に転換して、満足ではないのにやむをえないという気持ちがある労働者数が増加した。この現象が現れた理由は中国の改革開放以降の経済が急速に発達しているが、労働者たちの待遇水準はまだ改善していないので、彼らは不満とやむを得ないという気持ちがあることが普通だと考えている。

6. 結論

中国は前世紀の80年代から「改革開放」を実施する数年、中国の経済は大きな発展を実現したが、労働者たちは自分の待遇水準などの福利厚生に対する態度が不満になる。そして、不満の態度の中にやむを得ないという態度を表示する人数が多い。この態度がある原因は中国の労働者たちは自分の労働で国家の経済に貢献をもたらず認識があり、中国の経済も確実に成長したので、労働者たちは「自分の待遇水準を改善して欲しい」という願いを持つようになったと考えることが出来る。

【参考文献】

清川雪彦、2003、『アジアにおける近代的工業労働力の形成 ―経済発展と文化ならびに職務意識―（一橋大学経済研究叢書別冊）』岩波書店。
人民日报、2013、「统计局：1978以来我国经济社会的巨大变化」（2024年5月7日アクセス：https://www.gov.cn/jrzq/2013-11/06/content_2522445.htm）。

【謝辞】

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「中国機械工業における労務管理と労働者の職務意識に関する調査、1991・1995」（清川雪彦）の個票データの提供を受けました。心から感謝申し上げます。